
ホットニュース(平成15年度／第69号)

●今月の業界ホットニュース～中国便り～

暮れも押し詰まってきましたが、10月初旬からほぼ2ヶ月、中国にいるため日本のような季節感はありません。業務は「西部中核都市発展戦略」ということで、四川省の都江堰市、徳陽市、雲南省の大理市、玉溪市、湖南省の懐化市の5都市を回ってきました。都江堰、大理は観光都市でもありご存じの方もいらっしゃると思いますが、他は馴染みの薄い街だと思います。特に西部地域は、まだ都市化の端緒にある国ですから、いずれの都市も日本の10万程度の地方都市といった市街地規模の感じですが、日本の市域感覚でいくと50万都市です。この程度の都市がゴロゴロあるのですから、中国の奥の深さを改めて感じます。

沿岸部に比べて遅れている西部地域の都市化が、国家の重要な目標の一つとなっており、これらの都市でもすごい勢いで市街地開発を進めています。都市化の目標の受け皿となる開発区を設定・組織化し、既成市街地規模の倍以上の新市街地を先行整備しています。大部分が公有地なので、開発地の土地利用権譲渡の収入で整備をすすめるというやり方です。都市計画法や都市マスタープランも勿論ありますが、リアリズム都市計画(計画的な都市開発ではあるがマスタープランの枠を超えて進めている)の方が先行しています。日本のバブル期以上と懸念も感じますが、都市計画はすこぶる内政的な制度ですから、現在の中国の事情をそのまま現しているともいえます。なにしろ高速道路を年間4～5千kmも建設する国です。因みに日本は40年近くかかって8千km程度です。

(代表取締役 堀田 紘之)

●「道の駅」と「鉄道の駅」

先日、南房総に車で出かけた際に、改めて「道の駅」の充実ぶりに驚かされた。市町村ごとに1つはあるのではと思うほどで、30分も走れば次の「道の駅」に着いてしまうくらいだ。

のんびりとした旅行を楽しんでいたもので、全ての「道の駅」に立寄ってみたところ、どこも結構賑わっていた。高速道路のサービスエリアとは異なり、お店の中心となっているのは、お土産品ではなく、地元で取れたばかりの農作物や海産物である。私が最初に訪れたところでは、たった今畑から摘んできたばかりというお花を自転車に乗せて運んできたお婆さんが、自ら商品を陳列していた。まさに郊外の農地でよく見かける無人即売所が一箇所に集められたような雰囲気だ。こんな地元の方々の手づくりな雰囲気が、来街者には新鮮な印象を与え、地元の方々には町のスーパーのような役割を果たし、活気ある施設となっているのではないだろうか。

しかし、「道の駅」は自動車施設であるが故に、そのほとんどが市街地の外れに立地し、自動車でなければ利用することが出来ない。お年寄りや障害者、車を運転できない人たちでも利用できるようなになればよいのと思った。

一方鉄道駅は、「道の駅」とは異なり、そのほとんどが町の中心に立地している。また、交通バリアフリー法により、誰もが利用しやすい施設になりつつある。駅や駅前広場が、単に交通結節機能としてだけ存在するのではなく、「道の駅」のような機能も持ち合わせれば、まさに誰もが利用できるような施設となるだろう。私は、そんな「鉄道の駅」をこれから携わる業務の中でも考えていきたい。

(第一計画部 五十嵐 淳)

●スローライフと地域づくり(その1)

今回と次回でスローライフと地域づくりについて考えてみたい。最近、多くのメディアを通じて「スローフード」という言葉が一般化してきた。これはローマに進出した米国ハンバーガーショップの出店を契機に、ファーストフードの脅威という問題から発生した言葉であり、1)消えつつある郷土料理や質の高い食品を守る。2)質の高い素材を提供してくれる小生産者を守る。3)子供たちを含めた消費者全体に味の教育を進めていく。といったスローフード運動にまで発展している。

また、こうした思想に通じているものとして「スローライフ」という言葉も目にするようになった。これは、20世紀型の「早く、便利に、効率よく」といった経済優先社会のスピードに惑わされることなく、地域独自の歴史や文化や自然や環境や美しさといったものを大切に作る心(価値観)により、ゆとりを持って生活の質を楽しむといった生活哲学だと考える。

かつて、世界で最も若くして即位したブータン国王(21歳)が「国は貧しいかもしれないけど心の豊かさはどこにも負けない。GNH(国民総幸福量、Hはハピネス)はGNP(国民総生産量)より大切だ」と名言を残した。これもスローライフといった生活哲学に一種つづるものではないだろうか。

我が国も右肩上がりの社会状況は混迷を極めている。こうした状況での地域づくりの視点として、スローライフがキーワードになると考える。

特に、ゆとりを持った生活の質という点で、農村地域にこそスローライフな要素を多く内在している。しかし現在の農村集落は崩壊の危機に直面しているのも事実である。市町村合併により農村地域を広く抱える地方都市では、農村集落の再生の新たな展望としてスローライフな地域づくりの展開が盛んになれば地方都市の魅力は幅広く向上すると思う。また、岐阜市や掛川市をはじめ既に取り組んでいる都市も見られる。

では、具体的にスローライフな地域づくりによる農村集落の再生をどのように展開していくべきなのか。これについては次回に述べたい。

(第二計画部 海口晴彦)

アルメックホットニュース(平成15年12月15日発行)

////////////////////